

イセエビ放流技術開発事業（要約）

増殖科 鍋島 浩

1. 放流技術開発

(1) 中間育成技術の確立

餌料……採捕した稚エビにアサリ、オキアミを投与したが特にアサリへの嗜好が強かった。

密度……1、2期稚エビから約半年間飼育した結果、低密度飼育（26尾／t）の生残率は90%以上、高密度飼育（155尾／t）では50%以下であった。

成長……個別飼育の場合7月までにプエルルス、1期稚エビで採捕されたものは12月末には8、9期稚エビに成長した。

(2) 稚エビへの標識方法の検討

アンカータグが有効、装着可能サイズはCL 20mm以上、体重で10 g程度

(3) 放流適正サイズの検討

カサゴとの食害試験の結果からでは5 gサイズで放流可能と思われた。

2. 基礎技術

(1) プエルルス、初期稚エビの採捕

3ヶ所で4種類のコレクターで採捕、コレクターの形状による採捕数の差はなかった。

プエルルス 初期稚エビ

須崎市池ノ浦	11	6
窪川町志和	10	7
土佐清水市三崎	37	277

(2) プエルルス、初期稚エビの生態調査

夏～秋は海藻が繁茂し、適当な小孔のある水深3 mの岩礁域で4尾の稚エビ確認

(3) 成エビの標識放流

須崎市池ノ浦地先にアンカータグ標識で6～9月にかけて241尾放流、12月末現在3尾再捕

(4) 成熟、産卵期の把握

陸上飼育では5～6月に1番仔抱卵（抱卵期間：34～40日）7月に2番仔抱卵（抱卵期間：20～24日）、禁漁期間中に特別採捕したものは6月と8月に抱卵個体がみられた。

3. 放流環境要因調査

海藻及び底生動物調査

須崎市池ノ浦地先のイセエビ生息密度の高い漁場をはさむ半島を調査したが、植生は貧困で磯焼け状態に近かった。底生動物ではイセエビ餌料となる小型巻貝類の量は問題ないと思われたが、ウニ類が非常に多く、海藻の少ない原因の一つと考えられた。